

2017 Vol.11

GLOCAL



- International Education Week と「国際英語論」 — 塩澤 正
- 遊びと子どもの心 ————— 田中秀紀



- 孫のために働く—グルジアのバズロバで働く女性たち— 安井美穂
- 1930年代愛媛県新居浜市の工業地域の形成 — 鵜飼 要
- 愛知県西春日井郡内における旧「字」と現行地区との関係
————— 坪井宏晃
- 戦国期における甲斐国都留郡小山田氏の動向 — 堀 翔太



- シンポジウム:地域の歴史・文化を探り、創生を考える
- シンポジウム:庭園を読み解く



- 第7回 教員研究会
- 第6回 「院生の力」研究報告会

GLOCAL

GLOCALは、GLOBALとLOCALを組み合わせた造語であり、地球規模でのグローバルと身近なローカルを、ともに等しく重視する考え方を意味しています。



ごあいさつ

中部大学大学院、国際人間学研究科レポート GLOCAL Vol.11 をお届け致します。

現在、中部大学には6つの大学院研究科があります。そのうち国際人間学研究科は、1991年に国際関係学部を基礎に創設された国際関係学研究科国際関係学専攻をルーツとして発足しました。その後、1998年に設立された人文学部を基礎とする2専攻（言語文化専攻、心理学専攻）が2004年に合流し、名称も国際人間学研究科となりました。さらに2008年には歴史学・地理学専攻が加わり、現在の4専攻体制が整いました。

さて、小誌名の由来でもあるGLOBALとLOCALの関係は、今日では海外と国内の関係としてとらえるのが一般的です。しかし歴史を遡れば、国内スケールにおいて全国と地方がそのような関係として考えられていた時代がありました。これは日本だけでなく、地球上の他の地域においてもいえることで、地方が統一されて全国・国という概念が生まれ、国と地方が今日でいうGLOBALとLOCALに似た関係をもつようになりました。つまりGLOBALとLOCALの関係は相対的であり、時代は違っても似たような関係があったと思われます。

こうした相対的關係は、地表上の一地方言語から国際的に広まって「世界的言語になった英語」と、各地で使われている「局地的な英語」の間にもみとめられます。標準化（GLOBAL）の利便性には同意しつつも、一方では各地で使われる局地的英語（LOCAL）の存在を排除することはできません。社会的、文化的多様性を無視しては豊かな国際社会の未来は開けないからです。本号ではこうした関係について論じた「国際英語論」のほか、局地的立場に立たされた人々の生き様に関する事例研究も紹介されています。中世の日本と現代の東欧では時代、地域ともに状況は大きく異なりますが、列強勢力に囲まれた地方部族、あるいは社会の中で少数派として暮らす人々の生き方に関する研究です。

重要なことは、GLOBALとLOCALの関係が時代や地域を超えた普遍的な一般性をもっていることに気づくことだと思われます。通説に縛られることなく、むしろそれを疑い、柔軟な思考や発想に挑戦することに意義があります。「あそび」というありふれた概念についても、常識にとらわれることなく自由に思考の幅を広げていけば、この概念にそなわる別の意外な側面にも思い至るのではないのでしょうか。近代日本の一地方における工業化の過程、あるいは都市化にともなう歴史的な地名の変容といった現象についても、定説や思い込みを一旦、白紙に戻し、再検討することに意義があるように思われます。

このように取り上げるテーマは多様ですが、人々はいつの時代においても、個人や組織として文化的、社会的、経済的の制度にしたがいながら行動してきた。人間はこれまでどのように生きてきたか、あるいはこれから生きていこうとしているか、その軌跡と行く末を、教員、院生ともに明らかにしようとしている。これが国際人間学研究科の今であります。

小誌を通して、本研究科の日頃の活動の一端がご理解いただければ幸いです。

2017年10月15日

林 上（中部大学国際人間学研究科長）





Profile

国際人間学研究科 言語文化専攻 教授

塩澤 正 (SHIOZAWA Tadashi)

イリノイ大学アーバナ・シャンペイン大学院修了。MA (Teaching English as a Second Language)。専門は応用言語学と異文化コミュニケーション。環境と言語習得の関係、留学における言語習得、国際英語論とその教育的応用に関心がある。近著に、『国際英語論で変わる日本の英語教育』（くろしお出版、共編著）、『現代社会と英語』（金星堂、共編著）、『Global Activator』（金星堂、共著）などがある。



International Education Week と「国際英語論」



はじめに

本稿ではアメリカで2000年から始まった International Education Week の概要と近年日本でも認知され、理解者も多くなった World Englishes (国際英語論) について報告する。この2つは多様性の尊重という意味で同じルーツを持ち、グローバル化する社会でますます重要性を増してくると思われる。互いに非常に密接な関係にあると言える。

International Education Week とは

International Education Week とは、アメリカの国務省 (the U.S. Department of State) 中の教育文化局 (the Bureau of Education and Cultural Affairs) が中心となり、2000年より実施されている一連の国際理解教育活動であり、11月の第3週目に実施されている。もともと教育文化局のミッションはアメリカ人と他国の人々との間で、友好的で平和な関係を築くために相互理解を育成することである ("to foster mutual understanding between the people of the United States and the people of other countries to promote friendly and peaceful relations")。ちょうど、日本の外務省が国際交流基金を母体として、様々な奨学金などを提供し、日本人の国際交流を促し、将来の国際的なリーダーを養成しようとしているのとよく似ている。

教育文化局は、アメリカ中の教育機関、世

界中の大使館、ビジネス界や地域のリーダーたちに、この一週間の間に様々な国際理解や国際交流に関するイベントを行うように呼びかけている。その中には、海外の文化の紹介、講演、留学プロモーション、国際理解教育分野で活躍した人物の表彰、写真の展示、ワークショップ、世界の料理の提供、パレードなどなど様々な形態があり、それぞれの組織の実情に応じてプログラムを組むことが奨励されている。資金は提供されないが、その資料や方法などは教育文化局が提供し、国をあげてのイベントとなりつつある。

アメリカが国際理解教育？

すべて重要なことはアメリカ国内で起こり、世界中どこでも英語が通じると勘違いしているなどと、世界から揶揄されているアメリカ人だが、それは教育を十分に受けていないか、留学生や移民などとの接触が少ないアメリカ人にしかあてはまらない。アメリカのリーダーや知識層は、2001年の同時多発テロ以前から、アメリカ国民一般の国際理解不足や孤立主義に危機感を抱き、対策を考えていた。その一つがこの International Education Week 活動である。もとよりアメリカは日本など比較にならないほど多民族、多言語社会であり、国際理解教育の重要性を身近に感じていた教育者や政治家、企業人らは非常に多い。大学や企業では数十年前から留学生や外国教員、外国人雇用者なしではその繁栄はありえない状況にある。特に

大学では、理科系の教員の半数前後は非アメリカ人であり、大規模大学では、留学生は数千人にのぼる。アメリカが国際理解教育を推し進めるのはごく当然の流れと言える。

肌で感じた International Education Week

2016年の11月、筆者はたまたま「Tanaka-Ohio Award」(この International Education Week のイベントの一つ) の受賞の機会に恵まれ、本学の姉妹校であるオハイオ大学で様々なプログラムに参加することができた。日本 (特に中部大学との関係) に関する Open Forum、多民族化する授業の運営に関する教員向け Faculty Workshop、Keynote Speech、Book Reception、Awards Gala、写真展などに参加した。

ちょうど Trump 大統領が選挙で勝利した1週間後で、その反動 (アメリカ第一主義を掲げる Trump と多様性と国際理解の重要性を訴える大学との対立) もあり、想像を超える盛り上がりを見せていた。予想を上回る多くの学生やほとんどの教職員は何らかの形でこれらのイベントに関わり、真剣に議論し、パレード (デモに近い) で、その多様性や国際理解の重要性を訴えていた。日本の大学では、大抵そのミッションの一つに国際理解を掲げてはいるが、学生募集や国の政策の要求の一つとしてあるのみで、その本来の意味や重要性を理解し、尊重しているのは、ほんの一部の教員や職員であることが多い。ひどい

場合は、ミッションステイトメントとは裏腹に、予算的に削るべきものの筆頭として掲げられる。形式的な国際理解や国際交流に終始している日本の多くの大学と、身近にある重要問題として真剣に取り組み、多様性を重んじ、国際的な発想と行動ができるような学生を本気で育てようとしているアメリカの大学との温度差を実感した。

World Englishes とは

World Englishes (「国際英語論」) という考え方は、世界の多様な英語(インド英語やフィリピン英語等)をブローケン英語やピジン英語としてではなく、英語の一つのバリエーションと認知し、正当な扱いをすべきであると B. Kachru (1982) らが主張したところから始まる。多様性を認識・尊重し合い、理解のために互いに歩み寄るという意味で、International Education Week と同じ発想が根底にある。インド英語やフィリピン英語を英米の英語と同列に並べることに抵抗があること人は多いだろうが、アメリカ英語でさえも 18 世紀後半にウェブスターが登場するまでは、耐えがたい垂種であるとみられていた。現在は実質的に世界共通語となってしまう英語という言葉が、世界的な規模で変容を迫られているという現実がある。数百年かけて徐々に現代の形に変容した英語だが、世界の様々な言語や文化に触れて、それがあっていない速度と世界的な規模で変化しているのである。最近では、英語学習者の英語も(日本人の英語も)多様な英語の一つと考え尊重し、堂々と使用する権利があると主張する研究者もいる。いや、アイデンティティなどを考えると、英語母語話者に合わせた話し方をする方がおかしいという主張さえある(塩澤 2016)。

国際英語論の教育的意義

国際英語論の考え方をもとに英語を学ぶ意義は大きい。最も大きな意義を 3 つ紹介する。その一つ目は、国際英語論は学習者に到達不可能な目標を要求しないことである。もともとネイティブスピーカーと同じような発音や語彙能力を求めることは不可能である。と

ころが、その到底たどり着かないことを学習者に要求し、英語に対する不安や劣等感を与え続けていたのが母語話者の英語を唯一のモデルとする今までの英語教育であった。

二つ目の意義は、学習者を母語話者のように話さなければならないという「呪縛」や不安から解放することにより、学習者のアウトプットやインタラクション量を増やすことが可能になった点である。もともと母語話者のように話し、書く必要がないなら、言語習得で最も重要な要素の一つであるアウトプットやインターアクションが可能になる。

評価基準も再検討を余儀なくされている。言語能力は基本的に正確さ、流暢さ、複雑さの 3 つの観点から評価されるが、教育現場では今までは正確さのみが評価されてきた。今後は、流暢さや豊かな表現(複雑さ)を評価に入れる必要が出てくるであろう。減点法ではなく、加点法での評価が必要となる。

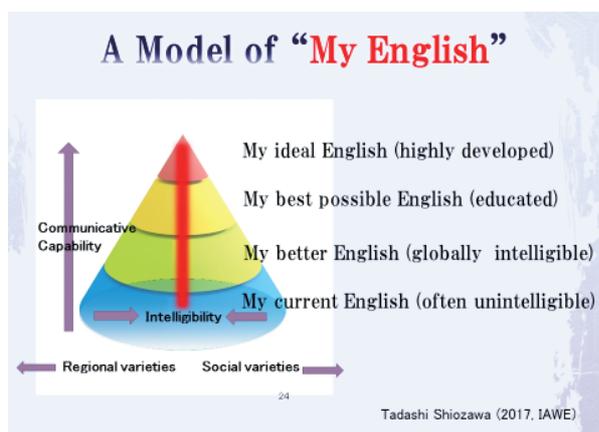
“My English” 学習者モデル

最後に国際英語論の考え方を反映した英語学習モデルを提案したい。母語話者の英語を目指す中間言語モデルや Kachru の英語の使用地域を元にした三円モデル(1985)と大きく異なる点は、学習者の視点から国際英語論を捉えた点である。

このモデルでは、最終到達目標は国際的なコミュニケーションの場で非母語話者として、「自分が理想とする英語話者(My ideal English speaker)になることである。下から、My Current English, My Better English, My Best Possible English, My Ideal English と 4 層になっているが、この区切りは特にはっきりあるわけではない。目標は自分が理想とする英語話者になることであるから、学習者個人によって異なってよい。共通する目標があるとすれば、国際的に汎用性が高く、communicative capability (Widdowson, 2003) が高い英語使用者を目指すことである。

よって、このモデルでは縦軸に communicative capability を取る。母語話者の言語能力を基準とする proficiency や competence ではない点に注目したい。横軸には、social varieties と regional varieties を置いている。3次元の円錐形であるが、これは地域的・社会的な偏りが高い英語を使つての国際的汎用性(intelligibility)を考慮している。中心軸に近いほど、この汎用性(国際的通用性)が高いということになる。現実的には標準的な学習者は My best possible English speaker になることを目指すことを念頭に入れている。しかし、高度な論文やビジネス文書などを書くような非常に高いレベルの英語使用者を目指す学習者も考慮し、My Ideal English を頂点に置いている。

学習者や教育者はこのモデルを念頭に置くことにより世界の英語使用の実態に合わせた現実的な英語学習・教育ができるのではないだろうか。もとよりこのモデルが複雑な言語習得プロセスを説明するものではないが、英語学習のプロセスを「My English の確立過程」という側面からとらえたという意味で、特別な意義があると考えている。



参考文献

- 塩澤正他 (2016) 『「国際英語論」で変わる日本の英語教育』東京：くろしお出版
- Kachru, B. (1982). *The Other Tongue*. Urbana-Champaign: University of Illinois Press.
- Kachru, B. (1985). Standards, conditions, and socio-linguistic realism: The English language in the other circle in Quark and Widdowson (eds). *English in the World*. Cambridge: CPU, pp. 11-36.
- Widdowson, H. (2003). *Defining Issues in English Language Teaching*. Oxford: OUP.



Profile

国際人間学研究科 心理学専攻 准教授

田中 秀紀 (TANAKA Hidenori)

京都大学大学院教育学研究科臨床教育学博士後期課程指導認定退学。修士（教育学）。臨床心理士。専門は臨床心理学。ユング心理学。遊戯療法。夢。心理臨床実践をもとに、無意識を前提とするJungやLacanの理論を参照しつつ、象徴化と現実性の観点から心理療法の研究を行っている。



遊びと子どもの心



遊びとは

遊びとは何であろうか。遊びの辞書的な意味を見てみると、遊ぶこと、賭け事や酒・色にふけること、仕事がないこと、暇なことなどが挙げられている。遊びは常に仕事や勉強との対比として定義される。仕事や勉強は生産性や目的性が設定されるのに対し、遊びは明確な生産性にこだわらない。仕事や勉強は重苦しさや生真面目さが設定されるのに対し、遊びは軽やかさや自由な部分がある。遊びは、日常性の否定としてのみ定義される側面を持つ。つまり、遊び自体を定義することが、極めて困難であるということである。

これに対し、Caillois, R (1958) は遊びを積極的に定義しようと試みた。Caillois, R は遊びは隔離された活動、自由な活動、規則のある活動、未確定の活動、虚構の活動、非生産的な活動の6つの活動に分類した。これ以来、遊びは記述的に分類されてきた。この記述的な分類さえも、遊びの本質—遊びとはどのような活動か—を考える一つの視点とはなりうるが、遊びそのものを捉えているとはいいがたい。本稿では遊び、遊ぶことにはどのような意味があるのかについて、心理療法の一つである遊戯療法から捉えなおすことを試みる。

遊戯療法とは

遊戯療法 (Play Therapy) とは、子どもに対して行われる心理療法の一つである。子

どもは不登校・心身症・発達障害・対人関係の問題などの心の問題を呈し、我々臨床心理士のもとにやってくる。遊戯療法とはどのようなものかを説明するものとして、しばしば語られるのが「子どもであるクライアントがセラピストと遊ぶことを通じて、子どもの心の問題を解消し、心の成長を促す」というものである。しかし、これでは遊戯療法について説明されたようで、実のところ何も説明がなされていない。それゆえしばしばクライアントから、あるいはその保護者から「遊ぶだけですか？」という素朴な疑問が呈されることがある。

なぜ遊ぶことが心理療法となるのだろうか？いくつかの説明をすることができるが、その一つは、遊戯療法では同じ部屋同じセラピスト、毎週1回50分という、非日常的な場が設定されていることが挙げられる。二つ目は、クライアントである子どものそのつどそのつどの自発的な遊びによって展開し、遊戯療法は子どもの主体性を重視していることが挙げられる。そしてそれら二つのことによって、遊戯療法に独特のリアリティ、遊びのリアリティが生じ、それが子どもの心に治療的な影響を及ぼすと筆者は考えている。これらのことから、遊びにはどのような意味があるのか、という問いを言い換えてみると、非日常性と主体性を人工的に設定した遊戯療法の場で生じる遊びのリアリティとは、どのようなものか？という問いに置き換えることができよう。

そこで本稿では遊戯療法の事例の一つだけ

取り上げ、そこで生じたことを臨床心理学的に検討することを通じて、遊びの特徴を捉えることを試みる。

遊戯療法の事例より

事例は小学校3年生の女兒、Aである。Aはイライラが多いこと、虫、葉っぱのギザギザ、鳥などへの恐怖症症状、宿題を細かいところまでこだわり2時間かかる強迫症状、登校しぶりを主訴に相談室に相談し、セラピストである筆者が担当した。

Aは苦手な給食を「しんどい」と言いだし、吐こうとする。母が弟に気持ちを向けるとAは殴る、蹴る、暴言で母に向かう。母から少しでも離れると不安になる。父はAが幼少時に離婚していた。

面接初期

Aが初めて来談した#1では箱庭を制作する。「こっちは赤ちゃんがいるところ」「赤ちゃんが生まれた。枕を敷いて寝てはる。それを『あ、寝てる』と猫が発見している」#2では棚の骸骨に「ガイコツ…」〈ほんまや〉とThは言うが「…」とAは無言。そして「あ、貝や。…これ綺麗やな」と箱庭を制作し「赤ちゃんのベッド。…これにしよか…やっぱやめとこ。…これにしよ」と丁寧に布団を畳みなおして、赤ちゃんのベッドを置く。

ここまでの様子から、Aの心理的な問題が推察される。母を独占しようとする、赤

ちゃんの場合が丁寧に整えられることは、何者にも邪魔されず、まどろみの中で母と一体となり、いつまでも保護され包まれる「赤ちゃん」のあり方にしがみついていると思われる。その一方で、母との一体的で無垢な世界に切れ目が入ってきたことが意識されてきてもいる。イライラや虫や尖ったものを嫌うこともまた、Aにとって無垢な世界を揺るがす怖いもの、攻撃的なものが意識されてきたがゆえに、それを避けようとしているのである。骸骨から目をそらすのは、A自身怖いもの、衝動性を感じてはいるものの、それから目をそらし、無垢なものへしがみつこうとしていることを如実に示している。それゆえAにとって怖いものは、Aを圧倒し、逆にAは怖いものに振り回されるのである。Aにとって怖いものはあまりにリアルであるゆえに、そのリアリティの方がAを凌駕していたといえる。

事例の展開

#3・4では描画をし、「真ん中のおばけが左のおばけを棒で殴っている。そこから血が出ている」絵や「かいじゅうの墓をゆうれいがほって骨を盗んでいるのでかいじゅうが怒って火を噴いている」絵など、次々と攻撃的なものが表現された。そして、#6では非常に丁寧に描いた「赤ちゃん」の絵を「持って帰りたい」と主張する。セラピストにそれを制止されると、セラピストからの帰りに「持って帰りたい」と大泣きしたという。この大泣きは、赤ちゃんの絵を失うことでまさに「母子一体」の世界から分離し、自分の欲求をはっきりと感じる「私」が誕生した産声であると思われた。それを示すかのように、その後の遊戯療法では、Aはセラピストを攻撃し、競い合う遊びを積極的に展開した。

#10ではもぐらたたき、#11では人形を置くバランスゲームに「あぶない～」とAは熱中。Thに「崩れる～」と言葉で攻撃して大笑いする。#13ではあっちむいてホイの勝者がハンマーで叩き、敗者はグローブで防ぐゲーム。Aはハンマーを持つ前から大笑いし、負けても思わずハンマーを取り「ひやははは～」と大笑いする。日常生活でもイライラなどの症状がなくなり、朝も起きるようになったという。

そして最終回（#14）では「今までと違

うものを作ろう」と箱庭を制作する。Aは触れられなかった骸骨に触れ「お化け屋敷。お化け屋敷やけど、本物のお化けが出る」とさらに灯籠、般若の面、お墓、千手観音を選んでいく。「すごく怖くしないと。怖い道を作ろう。かわいい道じゃなくて。何かいいのなかなー」と制作していく。

遊びのリアリティとは

Jung,C.G.によると、遊びは無意識の活動と非常に近接しているという。無意識の活動は、日常性を離れた意識の状態であると指摘している。また無意識の過程は説明されてわかるものではなく、実際の行為の中でしか体験されないと指摘している。

ここで、Aにとっての「怖いもの」に注目してこの事例を検討すると、Aにとって怖いものは、自分のコントロールを超えたものであり、それゆえAは怖いものに振り回され、ありありとリアルに怖さを感じるものであった。しかし遊戯療法の過程で、描画において攻撃的なものが描かれ、次に母子一体を失うことによって、自らの感覚をはっきりと認識する「私」が誕生した。それゆえもぐらたたき、バランスゲーム、ハンマーなど、自らの攻撃性を感じ、セラピストとの間で攻撃性を「遊ぶ」ことができるようになったといえる。

そしてAはまさに「今までと違う」怖いものの箱庭制作に自ら取り組む。この時点で、Aの怖いものに対する態度が大きく変わっていることが示されている。Aは自ら怖いものに対して触れていき、怖いものに対して主体的になっている。さらに、Aの方が怖いものを操作しようとしていることが伺える。このとき、「お化け屋敷やけど、本物のお化けが出る」という言葉は、怖いもののリアリティが否定されていることを示している、つまりAは怖いものが単なるモノ（玩具）であることを見抜いたのである。

怖いものの変容を通じて、怖いものに対して二つの動きが生じていることを指摘することができる。一つは、Aが自ら怖いものに触れていく主体的な動きである。もう一つは怖いものが単なるモノ（玩具）であることを見抜く否定的な動きである。そもそもAにとって骸骨（怖いもの）はAを圧倒し、Aを振り回し、それゆえ触れられないほどリアルなもの

であった。Aが怖いものを遊ぶことができるようになったということは、Aにとって骸骨（怖いもの）が怖いものでもあり、同時に単なるモノでもあるものとなったことを示している。つまり、遊びには、あるものに触れていくという動きと、あるものを見抜いていくという動きが同時に、そして二重に生じているということが言える。

それゆえ、「怖いもの」が遊ばれることによって、「怖いもの」は主体と深く関わるけれども、もはや自分を脅かすものではないものの、に変容したのである。

先に述べたJung,C.G.の観点で考えると、遊ぶことには、入っていく意識と否定する意識の二重の意識が働いているといえる。また遊ぶこととは、触れていく行為と見抜く行為の二重の行為が働いているといえるのである。

主要参考文献

- Caillouis, R(1958/1971)『遊びと人間』多田道太郎・塚崎幹夫訳、講談社、
田中秀紀(2015)遊ぶことの論理、広島国際大学心理臨床センター紀要、13、29-38。
田中秀紀(2014)箱庭に怖いものを置くプロセス、箱庭療法学研究、27(2)、51-62。



Profile

国際人間学研究科 国際関係学専攻 M1

安井美穂 (YASUI Miho)

1970年愛知県生まれ。中部大学大学院国際人間学研究科（国際関係学専攻）博士前期課程在学中。専門は文化人類学。現在、ジョージア国の市場で働く中高年女性5人組を主にインフォーマントとして研究している。



孫のために働く —グルジアのバズロバで働く女性たち—



はじめに

グルジア（現在のジョージア共和国、以降グルジアとする）の首都トビリシにディゼルテル・バズロバという市場がある。ここでは、ステーション・スクエア駅という総合駅の近くにあり、利便性のいい場所にある。この商空間で得られた情報をもとにフィールドワークで実際に経験したことを交えながら考察した。

さらにそこの市場で働く出稼ぎ中高年女性5人組みをインフォーマントとし、「孫のため」と言いながら、現金収入を稼ぐ様子を参与観察してきた。彼女たちの市場での生活に焦点をあてる。卒論内容と共に、今後の課題についても紹介する。

「グルジアの概要」

グルジアは、黒海の内陸に面していて北にロシア、南はトルコ、アルメニアがあり、東は、アゼルバイジャンに隣接している。気候は、首都は乾燥性大陸気候だ。温泉地もある。面積は日本の北海道に等しい広さである。

正式な国名は、ジョージア共和国 = Georgia 英語名、グルジア = Грузияはロシア語名である。国内では、サカルトゥヴェロ = საქართველო と呼ばれている。全体の人口は、430万人で、このうち首都トビリシには117万人が住んでいる。国土の面積は7万平方キロメートルでおおよそ、日本の北

海道と同じくらいの広さである。

次に民族は、主にグルジア人（カルトゥリ人）が83.3%で、アゼルバイジャン人6.5%、アルメニア人5.7%、ロシア人1.5%、オセッソ人0.9%、クルド人0.5%の順になる。言語は主に、グルジア語（カルトゥリ語）を話す。ロシア語も併用されている。

経済は、畜産業が盛んである。特に、乳製品は種類も多い。養蜂もさかんである。特産品は、オレンジなどの柑橘系、ぶどう、ワイン、茶があるが、水もかなり有名でボルジョミやナベグラヴィなどがある。鉱物資源はマンガン等がある。金融は、独立した翌年1992年世界銀行に加盟し、1995年通貨ラリを導入する。1ラリは日本円で約75円である。2016年9月現在のレートを参照した。

「グルジアの市場の概要」

グルジアの首都トビリシ市には大きな市場が3か所（サムコリ、リロ、ディゼルテル）があり中でも最大規模のディゼルテル・バザールに焦点を充てる。そこは食品、衣料、雑貨、貴金属、家電を豊富に取扱う市場である。

地図にはディゼルテレビとあるが、現地ではバズロバと呼ばれている。バズロバは「市場」を表す一般名詞であるが、バズロバの入り口にはバザールと書いてある。

「市場で働く女性たち」

ここでは市場で働く労働者の中から、一定期間定住し出稼ぎに来ている女性労働者を紹介する。同じ村出身5人でユニットを組み順番に市場へ労働に来る。

市場では、常時3人体制で仕入れから販売まで行うが、販売するときだけはそれぞれ独立して陳列し独自の販売方法で販売する。その彼女たちをインフォーマントとし、参与観察した中から過酷な状況の中彼女たちの一日の仕事の流れや食事、宿泊場所が今までにわかった。そしてその目的は何にも代えがたい「孫のため」であることがわかった。

おわりに

今後の課題として、この女性5人組を引き続き調査し、彼女たちの出身地であるチアトゥラ村における家族関係や生活、家族の職業などについて調査する。そのほか村での暮らしや、家族のあり方、家族の役割やその地域の女性が持つ特有の価値観を新たに情報集める。

グルジアでは、かつて社会主義であった。しかし、男女の役割や仕事の分業がある。彼女たちの労働状況を見ると社会主義と宗教が男女の役割にどう影響を与えているのかを今後も調査したい。



Profile

国際人間学研究科 歴史学・地理学専攻 博士前期課程 1年
 鵜飼 要 (UKAI Kaname)

1994年北海道札幌市生まれ。中部大学大学院国際人間学研究科（歴史学・地理学専攻）博士前期課程在学中。専攻は歴史地理学・経済地理学。卒業研究では、愛媛県新居浜市・山口県宇部市に着目した瀬戸内工業地域に関する研究を行った。現在では、卒業研究の中で1930年代において港の修築計画がみられるのと伴い工業地域の形成がみられることを確認することができたため、現代の瀬戸内工業地域の特色である化学工業都市を中心に瀬戸内工業地域の形成を検討する。



1930年代愛媛県新居浜市の工業地域の形成



瀬戸内工業地域と新居浜

瀬戸内工業地域は現在、石油化学コンビナートなどがみられる重化学工業地域として知られており、愛媛県新居浜市（以下新居浜）は住友の企業城下町として、1934（昭和9）年に成立した住友化学株式会社を中心とした化学工業、翌年に成立した住友金属株式会社を中心とした重工業がみられる。新居浜市は1937（昭和12）年11月3日をもって、当時新居浜町・金子村・高津村の3町村を合併することによって成立した都市である。

「別子銅山の末期」と新居浜港

新居浜地域の重化学工業化は1927（昭和2）年から始まった。当時の住友別子鉱山株式会社の常務である鷺尾勘解治が「別子銅山の末期」を発表した。鉱石の品質の低下、埋蔵鉱量の減少、採掘技術が進歩して23年以内に採掘し終えるといったものであった。また、鷺尾勘解治は五ヶ条の地方後栄策を1929（昭和4）年に発表し、新居浜港を改修する、埋め立てによる工場敷地の獲得、化学工業の拡張、機械工業を興すこと、共存共栄の思想を涵養することを挙げ、別子鉱山株式会社の名で新居浜港修築計画を愛媛県に申し出ている。

この修築計画は翌年に免許を受け、埋め立てを開始した。この修築の費用は1千万とさ

れており、船が横着け可能な港を完成させた。

新居浜港修築計画と並行して、新居浜港臨海部では大正期に製造していた硫酸と過磷酸石灰肥料に加え、硫酸肥料の製造を開始し、新居浜港から肥料、硫酸などを移出し新居浜を発展させていった。

新居浜市市制施行

1930年代前半では新居浜港修築が行われているなか、新居浜町・金子村・高津村の3町村の3町村合併の交渉が行われていたが、3町村合併問題として当時の新聞が取り上げている（「新居浜日日新聞」「愛媛新報」）。金子村は先ず新居浜町と町村合併が優先であり、高津村を入れるべきではないとし、一方、高津村は金子村を加える場合、町村合併を行わないという方針を出していた。

しかし、新居浜町と金子村の工場地帯・住宅地帯の境界が不明瞭になったこと、住友の修築計画が完成しつつあることを受けて、愛媛県が斡旋することにより、1937（昭和12）年6月25日に各地方議会にて合併の承認を可決し、11月3日に正式調印することで、新居浜市が成立した。これにより、新居浜市の総生産額8000万円（愛媛県下第一位）、人口約3万3000人（愛媛県4位）ということになり、工都新居浜市として成立した。

おわりに

瀬戸内海臨海部の工業地域に関する先行研究では、対象地域としては岡山県倉敷市水島地区や広島県呉市などといった山陽地域の研究が多く、かつ、製鉄・鉄鋼業などの重工業中心、及び、戦後の高度経済成長期にみられる石油化学工業に関するものが多くみられるが、愛媛県新居浜市では、戦前の1930年代に住友別子鉱山株式会社出願の新居浜港修築計画から、重化学工業化がみられることが明らかになった。

特に、着目しなければならない点としては、高度経済成長期にみられる石油化学工業中心によってみられる工業地域ではなく、硫酸や肥料などの化学工業がみられる工業地域であることである。つまり、現在みられるような化学工業を中心とした瀬戸内工業地域のルーツは1930年代にあると、新居浜市の事例からいえるのではないかと考える。

したがって、今後の研究としては、愛媛県新居浜市だけではなく、1930年代の瀬戸内海南部（北四国）の工業地域がどのような特色がみられるのかを、市町村合併、港湾などの関係を含み、研究をしていきたい。

参考・引用文献

- 「新居浜日日新聞」(昭和10年1月1日1p)
- 「愛媛新報」(昭和12年5月7日、1p)
- 『新居浜港開港30年のあゆみ』(新居浜港開港30年のあゆみ編集委員会、昭和55年)



Profile

国際人間学研究科 歴史学・地理学専攻 博士前期課程 1年

坪井 宏晃 (TSUBOI Hiroaki)

1983年愛知県生まれ。中部大学大学院国際人間学研究科（歴史学・地理学専攻）博士前期課程在学中。専門は地理学。現在、愛知県旧西春日井郡を研究対象地域として、引き続き旧字と現行地区との関係性について研究している。



愛知県西春日井郡内における旧「字」と現行地区との関係



はじめに

本研究では、愛知県西春日井郡旧師勝町および豊山町における、昭和初期を基準とした旧字について、それらの現在までの残存状況を検討した。

旧字の残存状況については、旧字名の現行地区名への継承状況に加えて、旧字の領域と対応する現行地区の領域との比較を重視して判断した。これは、地名の由来やその残存に関する研究は数多く存在する一方で、地名が示す領域の変化に着目した研究はほとんどみられないためである。

本研究の具体的な手法

本研究では主な資料として、「土地宝典」を用いた。この「土地宝典」とは、愛知県内においては、昭和初期から中期を中心に市町村ごとに作製された、地図の一種である。

本研究ではまず、旧字名の現行地区名への継承状況をみるために、「土地宝典」や自治体史などを参考にして、昭和初期の時点において存在していた字名を収集し、現行地区名との対応関係を示すデータベースを作成した。

加えて、「土地宝典」を画像データ化し、それを補正した上で、同じく画像データ化した現行 1:10,000 地形図上に重ね合わせることによって、現行の地図上に旧字の領域を正確に復元した。

そして、復元した旧字の領域と、現行 1:10,000 地形図に示されており、かつ、旧字名を何らかの形で継承している現行地区との領域について、それらどうしの位置および面積を比較した。なお、旧字域と対応する現行地区域の

面積の比較については、両者の面積をそれぞれ画像データをもとに算出した上で、その面積の重複割合の大小を、旧字域の残存状況の評価とした。

西春日井郡における旧「字」の残存状況

検討では、昭和初期の時点で既に集落であった範囲において、旧字域とその名称を継承している現行地区域とが、面積からみても高い割合で重複することが明らかとなった(図)。また、集落からは遠く離れており、かつて水田などであった範囲においても、旧字域と現行地区域とが比較的一致する傾向がみられた。

それに対して、かつての集落のすぐ外周と

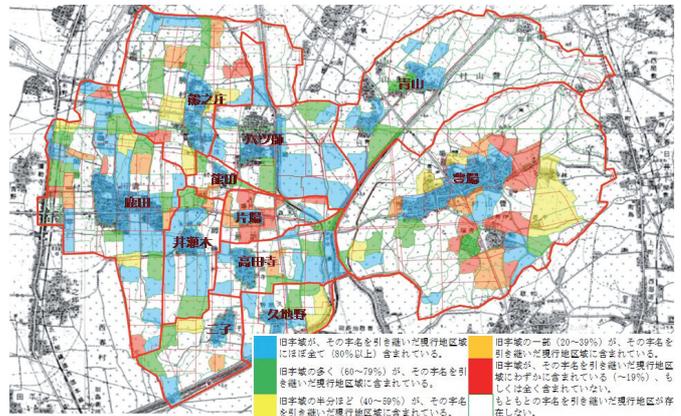


図 旧師勝町および豊山町における旧字域の現行地区域との重複状況 (1938年測量 1:25,000 地形図「名古屋北部」「小牧」に加筆) (赤太線は旧師勝村および旧豊山村の各大字の境界線、赤太字は各大字名)

なる範囲においては、旧字名を継承した現行地区がみられたとしても、それらの旧字域と現行地区域との面積の重複はわずかにとどまっていた。この範囲ではしばしば、かつての旧字域からは外れた範囲にある現行地区が、旧字名を継承している形となっていた。さらに同範囲では、旧字域と旧字名を継承した現行地区域とが、全く重複していないこともあった。

おわりに

今後は、研究対象地域として西春日井郡旧新川町、および旧山田村を追加し、両町村についても同様の検討を行う。そして、それらの結果を合わせて、西春日井郡において旧「字」と現行地区との間に、広くどのような関係性がみられるのかについて、考察を進めたい。



Profile

国際人間学研究科 歴史学・地理学専攻 博士前期課程 M1

堀 翔太 (HORI Syouta)

1994年岐阜県生まれ。中部大学大学院国際人間学研究科（歴史・地理学専攻）博士前期課程在学中。専門は日本中世史。現在、16世紀の甲斐国（現山梨県）における戦国大名武田氏の家臣小山田氏について、甲斐国・相模国・駿河国の隣接地域に注目して研究をしている。



戦国期における甲斐国都留郡 小山田氏の動向



はじめに

戦国期の甲斐国は、「国中」、「河内」、「郡内（都留郡）」の三つの地域に分かれていた。主に「国中」は武田氏、「河内」は穴山氏、「郡内」は小山田氏のように、それぞれの勢力が甲斐国内を分割して支配していた。

小山田氏の研究は、武田氏と小山田氏との関係及び「郡内」領の支配をどのように捉えるかという点を軸に展開された。小山田氏は武田氏領国において武田氏の譜代として位置づけられた。しかし、その一方で、小山田氏は後北条氏とのつながりを持っていたとされ、小山田氏は後北条氏と武田氏の両属関係にあったと言われている。

本稿では、都留郡小山田氏を取り上げて、武田氏と後北条氏との関係を踏まえつつ、小山田氏の動向の新知見について報告する。

永正・大永年間における 小山田氏の動向

永正年間から大永年間における小山田氏の動向に関して、先行研究では『勝山記』の永正七年（一五一〇）の条に、武田信虎と和睦したとあることから、小山田氏は武田氏の軍事下に置かれていたとみなされている。

そこで『勝山記』と小山田氏の発給文書などから見直していく。『勝山記』の永正五年（一五〇八）の条に、武田信虎と小山田氏が合戦し、小山田氏の家臣が討死にしたと記されている。永正六年（一五〇九）には、武田

信虎は都留郡へと乱入し、永正七年（一五一〇）に武田信虎と小山田氏は和睦したと記されている。しかし、永正十二年（一五一五）に今川氏の軍勢が甲斐を攻め、武田・小山田氏と戦ったが、永正十五年（一五一八）に今川氏は小山田氏と和睦した。小山田氏は武田家臣団の中で、独自に和睦しうる独立性の強い領主であったと考える。

大永年間的小山田氏の動向について、『勝山記』の大永四年（一五二四）の条に、武田信虎は猿橋（大月市）から奥三保へと進軍したとある。奥三保とは津久井郡の北部に位置し、都留郡と接する地域であるため、武田信虎は都留郡を通過して津久井郡に進軍しており、小山田氏もその軍に加わっていたと推測する。『勝山記』の享禄三年（一五三〇）四月二十三日の条に、小山田越中守信有は武田氏の先方衆として、八坪坂（現北都留郡上野原町大野）で北条氏綱と合戦したと記されているので、大永・享禄年間に小山田氏は武田氏に従ったと思われる。

天文年間における小山田氏の動向

『勝山記』の天文十年（一五四一）の条に、武田信虎は息子武田晴信に駿河へと追放されたことと記されており、武田氏の当主は信虎から晴信（後の武田信玄）へと移行した。小山田氏も越中守信有からその子出羽守信有へと家督が継承された。『勝山記』の天文二十三年（一五五四）十二月の条には、武田信玄の娘を北条氏康の子氏政に嫁がせる際に、出羽守の子弥三郎信有は、ひきめやく（邪気を払う役目）

を務め、後北条氏の居城小田原まで送り、同所にて越年したと記されている。

後北条氏領国における所領について記された『小田原衆所領役帳』に「他国衆」として小山田弥三郎・弥五郎の名が見える。天文二十三年に小山田氏は、武田信玄の娘を無事小田原に送り届け、婚儀を結ぶことができ、その恩賞として所領を北条氏康から与えられ、「他国衆」として位置づけられたと推測する。

おわりに

先行研究において、小山田氏は武田氏領国にどのように位置づけることができるのか、様々な議論がなされてきた。なかでも武田氏への小山田氏の従属については、『勝山記』の大永四年・享禄三年の条より、大永年間から享禄年間にかけて従属していったと考える。

また、後北条氏との関係について、小山田氏は天文二十三年に武田氏と後北条氏との同盟に武田氏の被官として外交役を担ったことで、その恩賞として後北条氏から所領を宛がわれたのである。したがって小山田氏は後北条氏とは従属関係を結んではおらず、後北条氏は小山田氏を武田氏の被官として認識しており、所領を与えたために「他国衆」として位置づけたのだと考える。

今後としては、小山田氏以外の武田氏の被官や他の領主に着目し、小山田氏との比較をするとともに、史料についてより一層考証を重ね、16世紀の甲斐国や駿河国、相模国といった南関東地域の中世社会について明らかにしたい。



中部大学の地元・春日井市松本町の歴史と文化について語るシンポジウム

2017年3月11日、不言実行館1階アクティブホールで、「地域の歴史・文化を探り、創生を考える」というテーマでシンポジウムが開催された。人文学部歴史地理学科と国際人間学研究科による共催で、中部大学のある春日井市松本町の歴史と文化について話し合われた。1960年に本学が春日井市松本町に新キャンパス建設を決めて以降、松本町の方々とは交流が行われてきた。このたび、松本町の歴史を町民の方自らがまとめることになり、人文学部歴史地理学科と国際人間学研究科が手助けをすることになった。シンポジウムでは、大学立地以前の農業（果樹栽培）や鉱業（亜炭採掘）、それに町の人々の暮らしぶりの様子を古老の方々から直接聞くことができ、有意義なシンポジウムであった。

中部大学人文学部歴史地理学科・大学院国際人間学研究科シンポジウム

主催：中部大学人文学部歴史地理学科・大学院国際人間学研究科・松本誌編集室

地域の歴史・文化を探り、創生を考える

—春日井市松本町による松本誌編集とCOC・地域志向教育の活動から—

2017年3月11日(土)
13:00~17:00 (開場12:30)

会場：中部大学 不言実行館

1階アクティブホール

シンポジウム開催の趣旨

2016年より春日井市松本町による松本誌の編集事業が開始されました。その調査に学生がCOC・地域志向教育の一環として参加しました。これらの活動と成果から、地域の歴史・文化を探ることの意義、その活性化・創生について考えていきます。皆様のご参加をお待ち致します。



開会あいさつ (13:00 - 13:10)

林上 (中部大学大学院国際人間学研究科教授)

地域の記録の保存と自治体史・誌の編集 (13:10 - 14:00)

- 伊藤博之 (松本誌編集委員長)
- 伊藤薫 (同委員)
- 伊藤和之 (同委員)
- 松浦日出美 (同委員)



地域の史料調査・聞き取り調査から (14:00 - 14:30)

濱田大夢 (中部大学学生)・田島実季 (同学生)・平林茉莉 (同学生)

昭和の松本を探る—亜炭の採掘と昭和の暮らし— (14:45 - 15:45)

松浦恵 (松本町住人)・伊藤金治 (同住人)

聞き手 森田朋子 (中部大学大学院国際人間学研究科教授)
篠宮雄二 (同教授)・松浦日出美 (松本誌編集委員)



総合討論「地域の創生とCOC・地域志向教育をめぐって」

(15:55 - 16:55)

閉会のあいさつ (16:55 - 17:00)

水野智之 (中部大学大学院国際人間学研究科准教授)

お問い合わせ先：中部大学国際関係学部事務局

〒487-8501 春日井市松本町1200

電話：0568-51-1111 (代表) ファクス：0568-52-1325

電子メール：inkn@office.chubu.ac.jp

内津川絵図

(春日井市教育委員会
文化財課所蔵)



春日井市松本町と中部大学



松本町の皆さんと教員・学生による話し合い

庭園の歴史を探り、政治的、象徴的意義を読み解くシンポジウムを開催

2017年6月3日、中部大学名古屋キャンパスで、人文学部歴史地理学科と国際人間学研究所の共催によるシンポジウム「庭園を読み解く」が開催された。日本には、近世、諸国の大名が庭園を築き、単に観賞用だけでなく、政治的、目的で利用したという歴史がある。ヨーロッパでも各地の君主が庭園を所有し、権威を対外的に示す空間として利用した。名古屋キャンパスに隣接する鶴舞公園も日本を代表する公園としてよく知られており、午後のシンポジウムに先立ち、公園内を見て回るガイドツアーも行われた。多数の庭園愛好家をまえに、歴史学や地理学の立場から、古今東西、庭園がつくられてきた背景と庭園が表象するものの意義について興味深い議論が行われた。



中部大学人文学部歴史地理学科・大学院国際人間学研究所 シンポジウム+ 巡検企画

庭園を読み解く

(中部大学人文学部歴史地理学科・大学院国際人間学研究所共催)

シンポジウム 庭園研究の可能性を探る — 「支配」「統合」「象徴」から庭園を読む

参加申し込み
参加費
一切不要

シンポジウム開催の趣旨

このシンポジウムでは、美の対象としてではなく、政治的支配や人心の統合、さらにはそれらを演出する象徴性といった観点から庭園を読み解く、という試みを通じて、様々な学問分野から庭園を研究する可能性を探りたいと考えています。会場にお集まりの皆さん、報告を聴くだけでなく、円座を通じてこの試みに奮ってご参加ください。

2017年6月3日(土) 午後1時～4時30分

会場：中部大学三浦記念会館 (名古屋鶴舞キャンパス)
大ホール

* 三浦記念会館はJR中央線・鶴舞駅北出口すぐにあります。
* 駐車場はございませんので、公共交通機関等をご利用ください。

報告 (午後1時～3時)

篠宮 雄二 「大名庭園に『支配』『統合』『象徴』を見ることは可能か？」
(中部大学人文学部歴史地理学科・大学院国際人間学研究所教授 日本近世史)

佐々井 真知 「イングランド王ヘンリ8世の庭園—史料から読み解くその役割—」
(中部大学人文学部歴史地理学科講師 中世イングランド史)

林 上 「『世界』を表現する縮小モデルとしての庭園」
(中部大学人文学部歴史地理学科・大学院国際人間学研究所教授 都市地理学)

円座 「語り合おう！庭園研究の可能性を！！」 (午後3時15分～4時30分)

話題提供者 白幡 洋三郎 (中部大学人文学部客員教授 比較文化史)

巡検企画 ブラ・ちゅうぶ！?

鶴舞公園を読む—歴史学・地理学から庭園を読む—

講師：山元 貴継

(中部大学人文学部歴史地理学科・大学院国際人間学研究所准教授 歴史地理学)

なぜ、そこに鶴舞公園があるのか？名古屋を代表する鶴舞公園の地理的な特徴やその成り立ちについて、公園内を歩きながら、みんなで考えてみましょう。鶴舞公園に隠された秘密を知りたいあなた、是非、お気軽にご参加ください。

2017年6月3日(土) 午前10時10分～11時40分

集合場所：中部大学三浦記念会館 1階ロビー (10時集合) *雨天決行



中部大学春日井キャンパス内



第7回 教員研究会を開催

第7回教員研究会が2017年7月26日に開催された。今回は、言語文化専攻の塩澤正教授による「田中オハイ賞」報告と「国際英語論」という考え方」、心理学専攻の田中秀紀准教授による「遊びと子供の心」が発表された。世界各地で使われている英語を正統英語と並んで積極的に評価しようという動きのあること、また子供の心をケアするのに「遊び」の手法が心理学的に有効であることが話され、参加した多くの教員との間で活発な議論が交わされた。

【配布資料5】

中部大学国際人間学研究科主催

第7回 教員研究会

2017年7月26日（水）
研究科委員会終了後（17時30分～）

人文学部 2階 会議室

第1報告
田中 秀紀准教授
心理学専攻

「遊びと子供の心」

第2報告
塩澤 正 教授
言語文化専攻

「田中オハイ賞」報告と「国際英語論」という考え方」

院生・学生の来聴を歓迎します。



第6回「院生の力」研究報告会を開催

第6回「院生の力」研究報告会が2017年7月5日に開催された。今回は、4月に研究科に入学した4名の院生により主に大学卒業論文の紹介が行われた。「企業城下町」「地名の変容」「中世の国人領主」「グルジアの女性」など多彩なテーマについて、院生、指導教授、参加者の間で活発な議論が行われた。



【配布資料3】

中部大学国際人間学研究科主催

第6回「院生の力」研究報告会

2017年7月5日（水）15時30分～17時30分

人文学部 2階 2522教室

第1報告
梶飼 要
国際人間学研究科 歴史学・地理学専攻 博士前期課程1年
「1930年代新居浜商工業地域の形成
—住友企業城下町の成立—」
コメンテーター：末田 智樹准教授（国際人間学研究科歴史学・地理学専攻）

第2報告
坪井 宏晃
国際人間学研究科 歴史学・地理学専攻 博士前期課程1年
「愛知県西春日井郡における旧「字（小字）」と住所表記」
コメンテーター：山元 貴穂准教授（国際人間学研究科歴史学・地理学専攻）

第3報告
堀 翔太
国際人間学研究科 歴史学・地理学専攻 博士前期課程1年
「甲斐国国人領主小山田氏の動向について」
コメンテーター：水野 智之教授（国際人間学研究科歴史学・地理学専攻）

第4報告
安井 美穂
国際人間学研究科 国際関係学専攻 博士前期課程1年
「「シュビリ・シュビリのために働く」
—グルジアのパスロバで働く女性たち—」
コメンテーター：中山 紀子教授（国際人間学研究科国際関係学専攻）

中部大学国際人間学研究科

国際関係学、言語文化、心理学、歴史学・地理学の各専攻は、文化的、歴史的基盤にたちながら、国際社会でコミュニケーション能力や関係構築能力が十分発揮できる人材、あるいは人間、社会、地域の本質を把握し、柔軟に行動できる人材を総力を挙げて育成します。



国際関係学専攻

科目【博士前期課程】

国際政治経済研究コース

政治経済研究特論/国際法特論/国際政治学特論/国際経済学特論/国際機構論/応用計量経済学/国際金融論/国際協力論/開発経済学特論/開発ガバナンス論/発展途上国論/国際社会開発論

国際社会文化研究コース

社会文化研究特論/文化人類学特論/国際社会学特論/観光人類学特論/国際ジェンダー論/比較文明論/比較環境論/比較社会史論/比較宗教論/ヨーロッパ社会文化研究特論/アメリカ社会文化研究特論/中東・アフリカ社会文化研究特論/中国・アジア社会文化研究特論/国際比較文明論/地域言語特殊研究

共通科目

研究方法論/臨地研究論/近代世界表象体系

特別研究

研究指導/課題指導

研究科共通

日本語論文の書き方

科目【博士後期課程】

国際政治経済学専門研究演習

国際社会文化論専門研究演習

国際比較文明論専門研究演習

心理学専攻

科目【博士前期課程】

心理学科目群

心理学研究法特論/知覚心理学特論/健康心理学特論

学校心理学科目群

認知心理学特論/社会心理学特論/発達心理学特論/臨床心理学特論/教育心理学特論/学習指導法特論/学校教育特論/障害児心理学特論/生徒指導特論/心理検査法特論/学校カウンセリング特論/教育統計学特論

特別研究

研究指導/課題指導

研究科共通

日本語論文の書き方

科目【博士後期課程】

学習心理学専門研究/教育心理学専門研究/認知心理学専門研究/臨床心理学専門研究

言語文化専攻

科目【博士前期課程】

ジャーナリズムコース

研究基礎(情報収集、メディア・クリティシズム)/現代国家・制度特論/現代史特論/情報産業・流通特論/現代社会特論/社会心理学特論/情報技術とメディア特論/ジャーナリズムと倫理特論/現代の広報特論/報道記事作成技法/ドキュメンタリー作成技法/プロジェクト/研究指導

英語圏言語文化コース

応用言語学特論/英語教育法特論/英語学特論/英米文学特論/英語圏言語文化総論/研究指導

日本語日本文化コース

日本語学特論/日本語教育学特論/古典文学特論/近代文学特論/日本文化特論/伝承文芸特論/日本芸能特論/国語教育特論/研究指導

共通

近代世界表象体系

研究科共通

日本語論文の書き方

科目【博士後期課程】

メディア・コミュニケーション専門研究

英語圏言語文化専門研究

日本語文化専門研究

歴史学・地理学専攻

科目【博士前期課程】

歴史学コース

日本古代史特論/日本中世史特論/日本近世史特論/日本近代史特論/日本現代史特論/アジア史特論/中国史特論/ヨーロッパ史特論/アメリカ史特論/社会経済史特論/思想史特論/文化史特論/技術史特論/美術史特論/歴史学研究

地理学コース

経済地理学特論/産業地理学特論/歴史地理学特論/文化地理学特論/都市地理学特論/地理情報学特論/都市政策学特論/自然地理学特論/地誌学特論/地理学研究

共通科目

近代世界表象体系

特別研究

研究指導

研究科共通

日本語論文の書き方

科目【博士後期課程】

歴史学専門研究演習

地理学専門研究演習

- 
-
- 発行：中部大学大学院国際人間学研究科
 - 編集者：林 上
 - 発行日：2017年10月20日
 - 〒487-8501 愛知県春日井市松本町1200
 - 中部大学国際人間学研究科（国際関係学部事務室）
 - 電話：0568-51-4079（直通） ●ファクス：0568-52-1325
 - 電子メール：inkn@office.chubu.ac.jp
 - 国際人間学研究科ホームページ：
http://www3.chubu.ac.jp/graduate/global_humanics/